『DEREK』第 35 号（2015 年）

キリシタン遺品における「荊冠のキリスト」図像

佐藤　芳哉
SATO, Yoshiya

目 次

序
1.　「荊冠のキリスト」図像の主題
2.　キリシタンの遺物に見られる「荊冠のキリスト」
　2. 1.　お掛け絵における「荊冠のキリスト」
　2. 2.　銅鋳にみる「Ecce Homo」
　2. 3.　『西洋銅版画帖』における「荊冠のキリスト」
　2. 4.　浮彫キリスト像
　2. 5.　色彩画の「荊冠のキリスト」図像
　2. 6.　「お掛け絵」と同一図像の銅版画
結　日本に伝来した「荊冠のキリスト」図像

図 1

図 2

序

16–17 世紀、カトリック宗教改革運動の最中に行われた世界的な宣教活動は、世界各地にカトリックの教義を伝えるだけでなくヨーロッパ圏ルネサンスの影響を受けたキリスト教美術作品を数多く広めることにも繋がった[(1)]。日本においても多くの聖画像が宣教とともに伝えられたとされている[(2)]。禁教下における迫害により、現存するキリスト教の聖画像は当時から考えればごくわずかであるが、それらの図像群は当時の信仰に利用されていた聖画像を今日に伝えている。

日本におけるキリシタンの聖画像を大別すると三つに分けることが出来るだろう。一つは宣教師により持ち込まれた舶載品の画像群である。ヨーロッパで制作されたものを日本に持ち込んだため、長い航海における保存と携行の便から、持ち込まれた絵画の大半は小型の銅板油絵だったと思われる[(3)]。

もう一つは宣教師の指導の下、日本人によって制作された初期洋風画[(4)]である。この作品の特徴は、西洋図像の模写でありつつも西洋的な基本美術教育の欠如から解剖学的、遠近法的知識の欠落が作品から判断できるという点である[(5)]。

最後の一つは禁教後の潜伏期、宣教師がいない環境でキリシタンが制作したと思われる聖画像群である。今日伝わる潜伏期の偶像としては中国から渡った子安観音像を聖母子に見立てた「マリア観音」が最も有名であるが、聖画像として今日に残るものは極めて少ない。その中で突出した現存数を誇るのが長崎県平戸市の生月島において、信仰対象として今日まで守り継がれてきた「お掛け絵[(6)]」と呼ばれる図像群である。「お掛け絵」における図像の特徴は、キリスト教図像の現地化がみられるという点である。構図や描かれる人物的特徴からキリスト教図像に由来するものと判断できるが、描かれている人物は東洋人の様相をしており、身に着けている衣服も着物である。キリスト教図像の現地化はこの当時世界各地で起こっていた[(7)]が、日本においてそれが確認されるのは「お掛け絵」においてのみである[(8)]。

キリシタンの図像研究に関しては今まで初期洋風画の研究が数多く行われ、多くの作品について、その成立背景や図像源が特定されてきた。一方で生月島における「お掛け絵」に関しては、長期にわたる潜伏期間における変容と安易に片づけられることが多く、詳細な図像研究[9]はいまだ途上であり、その現地化した変容過程ははっきりとしていない。またヨーロッパからの船載品と思われる図像に関しても研究が手つかずのものが多い。結果としてキリシタンの聖画の全体的な研究は未開拓な領域が多く、まだその全体像が明らかになったとは言えない。

そこで本稿においては、日本に残るキリシタン遺品において「聖母子」図像と並び突出した現存数を誇る「荊冠のキリスト」図像について、筆者がキリシタン遺品で確認している 24 点を網羅的にとり上げ、横断的に比較考察することで、日本において「荊冠のキリスト」図像がどのように受容されたのか明らかにすることを目指す。

1.「荊冠のキリスト」図像の主題

「荊冠のキリスト」図像にはいくつかの主題が存在する。代表的なものとしては「Ecce Homo（見よ、この人だ[10]）」というヨハネ福音書 19 章 5 節のピラトゥスの言葉に基づく主題がある。図像的特徴はヨハ 19:1–5 とその共観福音書部分であるマコ 15:6–14、マタ 27:27–31a に基づいており、両手を縄で結ばれた荊冠のキリストが右手に葦の棒を持ち、赤い外套やピラトゥス、兵士、周囲の群衆が描かれる場合もある。3 つの福音書のイメージが複合的に描かれているが、表題となる「Ecce Homo」という表現はヨハ 19:5 にしか出てこない。

柳によれば、「Ecce Homo」を主題にしたものは初期キリスト教社会にもビザンティン社会にも見られない[11]。松本はこの主題の最初期の図像として 980 年頃のライヒナウ派「エグベルト写本」を示している[12]。また松本は、この主題は 10 世紀末頃から図像表現の主題として登場し、その後 12–13 世紀の展開を通して、1400 年頃に「Ecce Homo」図像固有のテーマが成立したと見ている[13]。その背景には 13 世紀にフランス王ルイ 9 世

（在位 1214–1270）がキリストの荊冠なるものを入手し、パリのサント・シャペルに納めたことで荊冠に対する崇拝心が高まったことも挙げられる。[14]

その後 15 世紀末頃からは荊冠を被るキリストのみの全身像も現れる。一方では 16 世紀から 18 世紀にかけて瞑想用の図像として、ピラトゥスと二人の図像やそこに兵士が加わった三人の図像（図 3）が多く登場することとなる。

このような主題が中世末期に発展した背景にはヨーロッパにおける長期の戦乱と悪疫の流行による死の恐怖があったと柳は指摘している。[15]その結果「Ecce Homo」を含む受難関係の図像がこの時期に非常に発達したのである。

「荊冠のキリスト」図像を主題としたものには、「Ecce Homo」の他に「悲しみの人としてのキリスト」図像がある。ディルク・バウツ（Dirk Bouts, 生年不詳 –1475）[16]の《悲しみの人としてのキリスト》（図 4）は赤いマントに荊冠を被り一見して「Ecce Homo」の場面を示しているようにも見えるが、手や胸に痛々しいスティグマ（聖痕）があることから、これが磔刑により死した後のキリストであることがわかる。またパノフスキーによって「荊冠の救世主（Imago Salvatoris Coronati）[17]」と表されたディルクの《荊冠のキリスト》（図 5）には「悲しみの人としてのキリスト」を示すスティグマが描かれておらず、組まれた手はキリストが捕縛されていないことを示し、「Ecce Homo」の主題とも異なる荊冠のキリストが描かれている。後にこの作品は救世主という表現が不適切であるとして、単に《荊冠のキリスト（Christ crowned with thorns）》と題されるようになった。また「Ecce Homo」図像の直前の場面にあたる「キリストへの荊冠」の場面を主題としたヒエロニムス・ボス（Hieronymus Bosch, *ca.* 1450–1516）[18]の作品（図 6）にみられるような図像も「荊冠のキリスト」図像に含まれる。

2. キリシタンの遺物に見られる「荊冠のキリスト」

現在、筆者は「荊冠のキリスト」図像[19]として「Ecce Homo」を主題とした遺物 19 点を確認している。加えて「荊冠のキリスト」「キリストへの荊冠」を主題とする図像も含めれば、その総計は 23 点に及ぶ。さらに 1 点、現存しないが記録写真として残るものがある。

以下、その内訳を示す。

A）「Ecce Homo」

（ア）生月島のキリシタン共同体[20]より発見、平戸市生月町博物館・島の館所蔵

1. 山田地区旧日草 4 垣内御前様隠居（お掛け絵、銅版画：筆者推定）（図 1）
2. 山田地区旧日草 4 垣内御前様（お掛け絵、肉筆画）（図 2）
3. 館浦地区 I 家御前様（大型メダイ、銅鋳）（図 7）
4. 山田地区正和 3 垣内御神体（大型メダイ、銅鋳）（図 8）

（イ）徳川ミュージアム（旧水戸彰考館）所蔵

1. 「デウスの十戒」（部分、銅版画、縦 31.0 ×横 46.8cm）（図 9）
2. 『西洋銅版画帖』（XXV、銅版画）（図 10）

（ウ）東京国立博物館所蔵

1. 板踏絵（同構図同似寸法 4 点、木枠内銅鋳長方型浮彫、銅鋳部分縦 10.4–10.8 ×横 6.7–6.8cm）（図 11–14）
2. 真鍮踏絵（同構図似寸法 5 点、真鍮製、縦 18.8–18.9 × 横 13.6–13.8cm）（図 15–19）
3. 銅鋳（銅製、縦 9.5 ×横 6.7cm）（図 20）
4. 銅鋳（上部欠損、銅製、縦 8.8 ×横 6.5cm）（図 21）
5. 《キリスト像》（石板画彩色）（図 22）
6. 浮彫キリスト像（鮑貝製）（図 23）

B）「荊冠のキリスト」

（ア）岐阜市歴史博物館所蔵

1. 花鳥蒔絵螺鈿聖龕（部分、内部油彩画）（図 24）

C）「キリストへの荊冠」

（ア）徳川ミュージアム（旧水戸彰考館）所蔵

1. 『西洋銅版画帖』（XXIIII、銅版画）（図 25）

（イ）京都大学総合図書館所蔵

1. 《聖母十五玄義図》〈原田本〉（部分、紙本著色）（図 26）

（ウ）茨木市立キリシタン遺物資料館所蔵

1. 《聖母十五玄義図》〈東本〉（部分、紙本著色）（図 27）

D）〈補足〉現存しない「キリストへの荊冠」

（ア）浦上天主堂旧蔵

1. 《ロザリオ図絵》（部分、和紙泥絵）※ 1945 年消失（図 28）

2. 1. お掛け絵における「荊冠のキリスト」

生月島にはキリスト教禁教以前から今日に至るまで信仰を守り続けるカクレキリシタン[21]がおり、彼らが信仰の対象としている御神体を「御前（ごぜん）様（さま）」と呼ぶ。納戸に祀られている様子から納戸神とも呼ばれている。御神体には宣教期に流布していたキリスト教絵画を模写し、今日まで「お洗濯」と呼ばれる描き替えによって継承されてきた絵画図像「お掛け絵」の他に、メダイやロザリオなど宣教師が携行していたと思われるもの、生月島で殉教した信徒に由来するもの[22]などがある。

御神体の中でお掛け絵の数は最多であり、お掛け絵の中にはいくつかの図像主題が存在している。本稿において取り上げる「荊冠のキリスト」と題されたお掛け絵は 2 点存在する。この 2 点はともに山田地区の旧日草 4 垣内で祀られており、御前様の隠居（図 1）とそれを模写して描いたと思われる御前様（図 2）である。

御前様隠居（図 1）には荊冠をかぶりマントを羽織った男性が描かれている。マントの右側はずり落ち、右肩が露わになっている。男性は頭部を右方に斜めに傾げ、右方を見つめているようであるが、どこか虚ろな目をしている。右手には棒を持ち、クロスした手には縄が巻き付けられている。銅版画に見られる線の描写で陰影が描かれており、この作品が

銅版画であることを示している。荊冠や棘の傷から生じる血、巻毛やマントのしわに至るまで、細部の表現がとても巧みであり、西洋で刷られたのか日本で刷られたのかは定かでないが、元の銅版はヨーロッパの画家の手によるものであろう。興味深いことに画面上部がアーチ型になっており、潜伏以前に別の用途で使われていた図像が、お掛け絵として軸装され直されたと思われる。

対して御前様隠居（図 1）の「お洗濯」として描かれた図 2 の御前様は、細い線による陰影までほとんど忠実に模写しているが、手の表現や表情の描写に稚拙さがみられる。表情の視線は定まらず、目の位置と指の太さは観る者に身体バランスの違和感を与える。また図 1 でははだけていた右肩はこちらでは髭と髪で隠れて曖昧になっている。一見するとマントをしっかり首まで羽織っているようにも見える。以上のように図 1 との違いも認められるが、それは模写した者の力量不足を示すもので、「お洗濯」を行った図 2 の作者は出来るだけ正確な模写を目指していたことが作品から読み取れる。

生月島における「荊冠のキリスト」のお掛け絵は上記の 2 点のみであるが、御神体全体の中ではメダイ[23] 2 点にも「荊冠のキリスト」の図像がある。1 点は館浦地区 I 家にて祀られてきた御前様（図 7）、もう 1 点は山田地区正和 3 垣内で祀られてきた御前様（図 8）である。この 2 点のメダイは全く同じ構図であり、どちらも荊冠をかぶった男性が頭部を右方に斜めに傾げている。この 2 点もお掛け絵同様、葦の棒を持ち両手には縄が巻かれている。ただ、お掛け絵の図像とは異なりマントを肩に羽織っておらず上裸で、代わりに首にも縄が巻かれている。よく見ると手の重なり方や表現も異なっている。

I 家の伝承によると、図 7 のメダイは浜で拾ったものとされ、信仰に関わるものとしては理解されていなかったという[24]。また正和 3 垣内の御前様であったメダイ（図 8）には上部に「INRI[25]」と記されている。

生月島における「荊冠のキリスト」4 点全てに手や胸にスティグマは確認できず、荊冠を被った男性が右手に（葦の）棒を持ち、両手は縄で

結ばれている。また、お掛け絵 2 点の方にはマントのようなものも描かれている。これらはマタ 27:28–29 の記述とも一致し、教義的にどれほど理解して制作されたかは知りようがないが、図像学的には 15 世紀以降に成立したキリストの単身像タイプの「Ecce Homo」であると断定することが出来る。生月島における 4 点の作品はより正確には「Ecce Homo」と題するべきだろう。

2. 2. 銅鋳にみる「Ecce Homo」

現存キリシタン遺物において最多の同図像が発見されているのが銅鋳に描かれた「Ecce Homo」である。板踏絵、御神体のメダイを含む 8 点（図 7–8、11–14、20–21）が確認されており、ほとんどが縦 10cm 程度、横 7cm 程度のサイズであり、紐穴のついた突起物が確認できる。紐穴は小型のメダイに多く見られるが、小型のメダイには「荊冠のキリスト」図像はない。長さ 10cm の銅鋳を首から下げるために制作したとも考えにくく、おそらくこの紐穴は携行しやすくするために取り付けられたものであろう。

この図像は荊冠を被った男性が右手に（葦の）棒を持ち、頭部を右方に傾げている。首や手には縄が巻かれており、上半身には衣類を纏っていない。腕は左手の上に右手が重なっており、うっすらと頭部のまわりにニンブス[26]も確認できる。損傷が激しくそれらの確認が困難なものが 1 点（図 21）あるが、同様の図像であったとみていいだろう。損傷の激しい銅鋳はヨーロッパ製の同図を模造した日本製でないかと言われている[27]。

生月島の 2 点を除き全て東京国立博物館で所蔵されているもので、元は長崎奉行所で保管されていたものである。長崎奉行所ではキリシタンを取り締まり、没収した聖画像などの一部を保管していた。一部は板踏絵のように踏絵に転用もしている。よってこれら 6 点は長崎奉行所によって没収されたものであると推定できる。

踏絵が始まった時期は定かではないが 1631 年には踏絵の記録が既に残されている[28]。1669 年には踏絵不足を解消するために長崎奉行所が鋳

物師萩原祐佐に依頼して 20 枚の真鍮製の踏絵[29]を作らせている。そのうちの 5 点が「Ecce Homo」（図 15–19）であり、構図が上記の 6 点と極めて類似している。このことは長崎奉行所が保管していた上記 6 点のいずれかを模造した可能性を示している。なお、これらの真鍮踏絵における目鼻の摩滅は製作者の力量不足や長年踏まれ続けた摩滅によるものではなく、制作する段階からわざとそのように作ったと考えられている[30]。

2. 3.『西洋銅版画帖』における「荊冠のキリスト」

徳川ミュージアム所蔵の西洋銅版画帖は 49 枚の銅版画からなり、キリストの生涯を描いたものである。番号は全部で 43 番まであるが途中に欠損したと思われるページがあり、番号の振られた版画は 37 枚のみである。残りの 12 枚は付け足されたと考えられる聖人などの版画である。最初のページ下部には「ペトルス・パウロ・パロンブ・ノヴァリクス 1573 年ローマにて刊行す[31]」と記されている。パロンブは 16 世紀中ごろにローマに住んでいたナヴァルラの複製銅版画家で、版画商も兼ねていたと見られる[32]。順番にキリストの生涯とその場面が下部にラテン語で記されている。この中の（XXIIII）（図 25）と（XXV）（図 10）が「荊冠のキリスト」を主題とした図像である。

以下は下部に記されたラテン語の日本語訳[33]

・（XXIIII）
王のなかで最高の王よ、あなたはこの不当な冠を被っています。この冠は私の罪にこそふさわしいのです。

・（XXV）
「この人を見よ」と司法官よ、あなたは言いました。不敬な人々の群れは何の心も動かされませんでした。「ここに神を見よ」と言いなさい（あなたはおそらくひざまずくでしょう）。

（XXIIII）（図 25）の図像では二人の刑吏が枝でキリストの頭を小突き、これを指さす人物が右側にいる。この指さす人物はマタ 27:27–31 におけるあざけりを表現しているとみられる。この図像に類似した画像は《聖

母十五玄義図》や《ロザリオ図絵》の部分（図 26–28）にも確認することが出来る。

（XXIIII）の次の場面が（XXV）（図 10）の「Ecce Homo」の場面である。この図像では荊冠を被りニンブスの輝くキリストが刑吏に連れて来られる様子が描かれている。キリストは腕を結ばれ右手に葦の棒を握っている。広場には群衆が押し寄せており、奥には 3 本の十字架と無数の槍が見て取れる。前景で大きく手を広げている男性はピラトゥスであろう。

構図は日本に多く伝わっているキリスト単身像タイプの「Ecce Homo」ではなく、ボスの作品（図 29）に近い構図となっている。この版画帖はキリストの生涯を描いた構成になっているため、ここではより聖書の記述に沿った構図がとられている。

2. 4. 浮彫キリスト像

東京国立博物館所蔵の浮彫キリスト像（図 23）は元長崎奉行所宗門庫の所蔵品で、貝に装飾が施された珍しい作品である。一見すると受難の場面には思えないが、手が結ばれており、マントを羽織り、右手には棒を持っていること、何より後景に「Ecce Homo」と記されていることから、その題がこの図像の主題であると断定できる。ニンブスと一体化しているようにも見えるが、荊冠も描かれている。貝製であることからインドやゴアで作成された可能性が指摘され[34]、またアルファベット表記にぎこちなさがあることから日本人による制作とも考えられている[35]。表現は稚拙であるが、「お掛け絵」の「荊冠のキリスト」と上半身の構図がよく似ている。また背景には葡萄やレンガ、柱が描かれており、上部がアーチ状の柱に囲われているのも興味深い。

2. 5. 色彩画の「荊冠のキリスト」図像

キリシタン遺物では 2 点だけ色彩画の「荊冠のキリスト」図像が残っている。1 点は岐阜市歴史博物館所蔵の花鳥蒔絵螺鈿聖龕（かちようまきえらでんせいがん）の内部にある油彩画（図 24）である。荊冠を被り赤い服を着ているが、肩より上部

しか描かれておらずスティグマや手の縄、葦の棒などを確認することは出来ない。しかし涙が描かれており、これがディルク・バウツに端を発する「荊冠のキリスト」を主題とする図像であることがわかる。荒木によればディルク以前に「荊冠のキリスト」を主題とした画家はなく、涙と「荊冠のキリスト」をあわせて描いたのもディルクが最初だとしている[36]。この油彩画はヨーロッパから持ち込まれたものと考えられ、花鳥蒔絵螺鈿聖龕そのものもヨーロッパの土産品であったと考えられる[37]。その為、この作品が日本に来たのは南蛮貿易が最盛期の頃だと筆者は考えている。また 17 世紀初期の成立であるとの記載が図録にある[38]ことから、すでにこのような工芸品はヨーロッパでも知られていたと思われ、図像もキリシタンのために持ち込まれたものではなく、ヨーロッパ側の商人から依頼されたために用意した図像であるかもしれない。

もう 1 点は東京国立博物館所蔵の石版画に描かれたキリスト像（図 22）であり、「Ecce Homo!」との表題も付けられている。マントの羽織り方や腕の組み方など、「お掛け絵」における「荊冠のキリスト」によく似ているが、この作品は唯一、上を見上げている構図になっている。

2. 6.「お掛け絵」と同一図像の銅版画

徳川ミュージアム所蔵の「デウスの十戒」には 3 枚の銅版画がまとめられている。しかしそれぞれの図像の関連性や劣化具合がそれぞれ異なることから、のちに合装されたものと見られている。この中の 1 枚が《Ecce Homo》（図 10）である。筆者はこの図像が生月島におけるお掛け絵と同一図像であると推定している。劣化が激しいものの山田地区旧日草 4 垣内御前様隠居（図 1）と細部に至るまで完全に一致している。断定には詳細な調査を待つ必要があるが、これは「お掛け絵」と同様の図像が他の地域にもあったことを示す確かな証拠である。

この図像に関してはわずかに菅野が触れているが、図 2 における稚拙表現を指摘するに留まっている[39]。また菅野はこの図像をヨーロッパ伝来のものとも断定している[40]。

結　日本に伝来した「荊冠のキリスト」図像

以上、現在筆者が確認している「荊冠のキリスト図像」についてキリシタン遺物を網羅する形で横断的に概観した。上記計 24 点の「荊冠のキリスト」図像を主題ごとに見ていくと「Ecce Homo」が最多で 19 点確認され、踏絵のために制作された真鍮踏絵を除いても 14 点あり、突出していることがわかる。続いて多いのが「キリストへの荊冠」であり、4 点確認される。そして涙を流した「荊冠のキリスト」が 1 点存在する。

「キリストへの荊冠」図像はどれもキリストの生涯の一場面としてのみ描かれており、その図単体での作品は存在していない。日本においては、この図像はキリストの生涯の一場面として聖書理解を促すのみで、この図像に信仰が集められることはなかったのであろう。

対して「Ecce Homo」は、唯一西洋銅版画帖における「Ecce Homo」が聖書理解に有効な構図をとっているが、それ以外は聖書理解よりも受難を耐えるキリストが強調されている。

ヨーロッパではこの当時キリストと一緒にピラトゥスや兵士が描かれているタイプの、カラヴァッジョ（Michelangelo Merisi da Caravaggio, 1571–1610）が描いたような「Ecce Homo」（図 3）も多く登場しているが、日本においてはキリストの単身像のみである。宣教師はそれらの選択肢がある中で好んでキリストの単身像タイプの「Ecce Homo」を持ち込んだということになる。

涙の「荊冠のキリスト」図像はキリシタンのために持ち込まれた図像でない可能性もあるが、どちらにせよキリシタンがこの図像を「Ecce Homo」と明確に区別することは出来なかったであろう。

東京国立博物館所蔵の 13 点は全て長崎奉行所の旧蔵品であり、これに生月島で発見された 4 点と浦上天主堂旧蔵の 1 点を加えると、18 点もの「荊冠のキリスト」図像が長崎で発見されたことになる。長崎奉行所によって作られた真鍮踏絵 5 点を除いても 13 点もの作例が長崎に持ち込まれた、あるいは長崎で制作されたこととなる。このうち特に「Ecce Homo」を主題とする銅鋳は 8 点確認されており、突出した現存数である。

これは一見して、この単身像タイプの「Ecce Homo」図像が広くキリシタンに流通していたことを思わせるが、興味深いことにメダイも含めて長崎以外での発見例がほとんど見当たらないのである。

このことから、この図像が長崎で限定的に流通したのではないかと考えられる。銅鋳には日本人が模造したと考えられるものがあり、同一図像の銅版画も発見されている。同構図の銅版画があったことや同型の銅鋳が複数あったことは、日本において複製され流布されていたことを示唆するが、その流通の痕跡が長崎に集中しているのである。もちろん禁教弾圧期の聖像破壊を考慮するならば、長崎以外での発見例の少なさが長崎での限定的な流通を示すことにはならないが、長崎での突出した発見数はその可能性を示すものであると考えている。

また、描かれている主題も特徴的である。「荊冠のキリスト」のいくつかの図像パターンが日本に伝わっているにもかかわらず、遺品は単身像の「Ecce Homo」に偏っている。イエズス会宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis, 1532−1597）は 1584 年 12 月 13 日付けの書簡で日本人の好む図像を記している。以下、該当部分和訳。

> 「今のところでは、最も役に立つような図柄はおよそ次のものであろう。すなわち、地球を手にもつ救世主、主キリストの御変容、御復活、あるいは群衆に説教している場面。われらのセニョーラ（マリア）の絵、三王の礼拝、また何人かの聖人の絵である。大きさは 1 フェリオ（31 × 21cm）やその半分。これによってキリシタンが大変満足するであろう[41]」。

「Ecce Homo」の現存数から、この図像が多く持ち込まれていたのは明らかであるが 1584 年時点では「Ecce Homo」の図像に関する言及がない。また「磔刑図」などの受難の図像が含まれていないことにも注目するべきだろう。しかしながらキリシタン遺品にあるキリスト図像の多くは受難のキリスト図像なのである。

筆者は禁教によって受難の主題が重要視され、受難物語の図像が伝来するようになったのだと見ている。日本における宣教活動は 1597 年の

二十六聖人殉教（長崎西坂での処刑）を機に、政治的・経済的・教育的宣教活動から殉教物語の舞台としての宣教地へと変化してゆき、1614年以降、激化した弾圧により民衆のキリシタンにも死の恐怖が色濃く表れたときに「Ecce Homo」という主題が宣教師によって好まれ、キリシタンに受容された、というのが筆者の主張である。

禁教前に隆盛し、イエズス会士で画家のジョヴァンニ・コラ（Giovanni Cola, *ca.* 1558–1626）[42]が1614年に数年の弟子を連れてマカオに亡命することで日本での記録が途絶える初期洋風画[43]には受難物語が主題となっている現存作例は確認されていない。「荊冠のキリスト」図像が、宣教師らの最後の活動拠点であった長崎での発見に偏っていることも、この図像を持ち込んだ宣教師が長崎以外で活動できる環境になかったことを示唆する。また真鍮踏絵が使用されるまで多くの聖画像が踏絵に転用されているが、聖画像の寿命が短く度々新しい聖画像に取り換えられていた記録が残っている。そのような中、現在まで多く残ったのが「荊冠のキリスト」図像なのである。これは、長崎奉行所に押収された時期が遅かったことを示唆している。

宮崎は、ヨーロッパから日本に宣教に訪れる者は自ら殉教を望んで宣教に訪れていたと見ている[44]。殉教は宣教師にとって天国の道が約束されたもので、特に禁教後1614年以降の宣教は殉教のために行われる側面があった[45]。

殉教を望む宣教師と、彼らにつき従い弾圧に恐怖するキリシタンたちの精神を支え得た図像が「Ecce Homo」であったのではなかろうか。

注

（1）　若桑みどり『聖母像の到来』（青土社、2008年）第一章参照。

（2）　同書、107–110頁。

（3）　江口正一「東京国立博物館保管のキリシタン関係遺品」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』No. 249（東京国立博物館、1971年12月）7頁参照。

（4）　日本のイエズス会の工房（セミナリオや画学舎）で教育を受けた画家た

ちのことを「イエズス会画派」と呼び、彼らによって描かれた洋風画を初期洋風画と総称する。坂本満「南蛮文化と洋風画の伝来」『南蛮美術の光と影――泰西王侯騎馬図屏風の謎』（展覧会カタログ）日本経済新聞社、サントリー美術館（東京）、神戸市立博物館（日本経済新聞社、2011 年）10 頁参照。

（5） 若桑、前掲書、157 頁参照。

（6） 生月島のカクレキリシタンが御神体として信仰対象としている軸装された絵。

（7） インドの「マノハール《聖母》」や中国の「念珠規定」など、描かれる人物や衣服が現地化している。若桑、前掲書、323 頁参照。

（8） 若桑、前掲書、324 頁参照。

（9） 生月島におけるカクレキリシタン研究としては田北耕也の『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術研究会、 1954 年）、宮崎賢太郎の『カクレキリシタンの信仰世界』（東京大学出版会、 1997 年）が代表的であるが図像研究としては若桑みどりの『聖母像の到来』（青土社、 2008 年）が挙げられ、現在は上智大学の児島由枝や生月町博物館・島の館が生月島のカクレキリシタンについて現地における研究を行っている。

（10） *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007[5] (1969), Io 19:5 参照。訳語としては『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳（岩波書店、2004 年）ヨハ 19:5 参照。

（11） 柳宗玄『キリスト――美術にみる生涯』（八坂書房、 2012 年）103 頁参照。

（12） 松本富士男「受難物語におけるイエス像――エルサレム入城から『エッケ・ホモ』まで」『キリスト教美術の誕生と展開』（聖心女子大学キリスト教文化研究所、1983 年）97 頁参照。

（13） 同書。

（14） 柳、前掲書、103 頁参照。

（15） 同書、104 頁参照。

（16） 初期フランドル派の画家。

（17） 荒木成子「ディルク・バウツの涙を流す〈荊冠のキリスト〉」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第 22 巻（2014 年）89 頁参照。原文は

Erwin Panofsky, “Jean Hey’s < Ecce Homo >: Speculations about it’s Author, its Donor and its Iconography,” *Bulletin*, Koninklijke Musea voor Schone Kunsten van België, 5, 1956, p. 112.

（18）初期フランドル派の画家。

（19）荊冠のキリストが描かれている図像には磔刑図も含まれるが、本稿では荊冠のキリストが主題となっているもののみを取り上げる。

（20）生月島内の集落にはそれぞれ垣内、津元と呼ばれるカクレキリシタンのまとまった組が複数存在する。

（21）16–17 世紀に伝えられたキリスト教（カトリック）は 1614 年の江戸幕府による本格的なキリスト教禁教により、17 世紀半ば以降、日本にいる信者は宣教師不在の中でその信仰を続けていくこととなった。その結果、教義や儀礼が独自に変容している。

（22）かつて禁教による弾圧により信徒が殉教した地、中江ノ島は生月島のキリシタンたちの聖地となり、その島でとれる水を「お水瓶」という御神体とするようになった。

（23）宣教期に伝わったメダイを御神体としたもので金仏様（かなぶつさま）とも呼ばれる。特に 10cm を超える大型のメダイを御神体としている例が多い。

（24）中城忠『かくれキリシタンの聖画』谷川健一編（小学館、 1999 年）106 頁参照。

（25）「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」（Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum、ヨハ 19:19 参照）の意を表すラテン語の頭文字。

（26）光背。

（27）「信徒発見」150 周年記念事業世界遺産推薦記念特別展「聖母が見守った奇跡――長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（展覧会カタログ）、（特別展「聖母が見守った奇跡」展実行委員会、2015 年）60 頁参照。

（28）宣教師カルワリョが踏絵を強要されたとの記録が残る。永山時英「増補訂正　切支丹資料集　第一輯」（丸善、1925 年）参照。

（29）現存する真鍮踏絵は 19 点で 1 点欠けている。内山善一『キリシタンの美術』内山善一、千澤楨治、西村貞編（宝文館、 1961 年）153 頁、江口、前掲書、7 頁参照。

（30） 同書、6 頁参照。
（31） 菅野陽「研究資料　キリシタン関係銅版画」『美術研究』285 号、188 頁参照。
（32） 同書。
（33） 同書、190 頁参照。
（34）「特別陳列　キリシタン関係の遺品　イエズス会の布教と禁教下の信仰」作品リスト、東京国立博物館（会期 2013 年 3 月 19 日 –5 月 6 日）参照。
（35） 内山、前掲書、25 頁参照。
（36） 荒木、前掲書、89 頁参照。
（37） 前掲書、『南蛮美術の光と影　泰西王侯騎馬図屏風の謎』、220–221 頁参照。
（38） 同書、221 頁参照。
（39） 菅野、前掲書、185–194 頁参照。
（40） 同書、185 頁参照。
（41） 若桑、前掲書、110 頁引用。原文は 1584（天正 12）年 12 月 13 日フロイス書簡、チースリク「レオナルド木村――絵描き―修道士―殉教者」、キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第 25 輯（吉川弘文館、1985 年）10–11 頁参照。
（42） セミナリオにおいて画技の指導を行ったイエズス会の画家であり、初期洋風画の画家の多くは彼の門下生にあたる。マカオに亡命する際、数名の門下生もともに亡命した。
（43） 指導者と数人の門下生の亡命に、1614 年から始まる江戸幕府による本格的な禁教政策により、初期洋風画の書き手である「イエズス会画派」の活動は表向き途絶えるが、「聖フランシスコ・ザビエル」（市立神戸美術館所蔵）のように 1614 年以降の制作が指摘されている作例も存在している。若桑、前掲書、180–182 頁参照。
（44） 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像――日本のキリスト教理解と受容』（吉川弘文館、2014）28–30 頁参照。
（45） 同書。

（立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程前期課程在学　さとう・よしや）

図 版

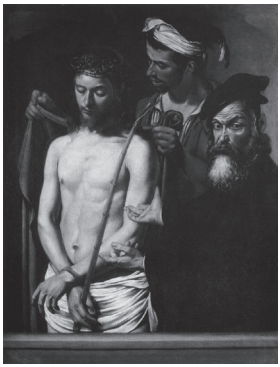

図 3

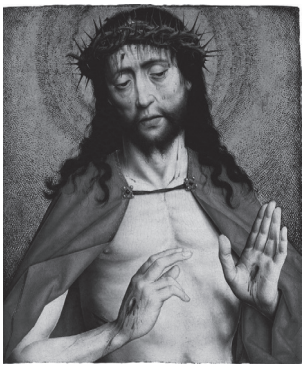

図 4

図 5

図 6

図 7

図 8

図 9

図 10

図 11

図 12

図 13

図 14

図 15

図 16

図 17

図 18

図 19

図 20

図 21

図 22

図 23

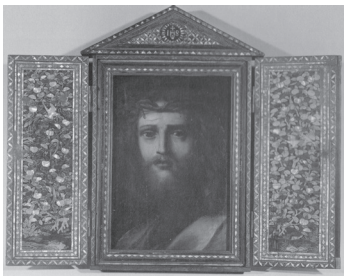

図 24

図 25

図 26

図 27

図 28

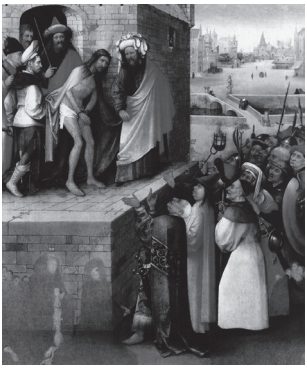

図 29

図 版 一 覧

図 1.　お掛け絵《Ecce Homo》（山田地区旧日草 4 垣内御前様隠居）、銅版画（筆者推定）、平戸市生月町博物館・島の館

図 2.　お掛け絵《Ecce Homo》（山田地区旧日草 4 垣内御前様）、肉筆画、平戸市生月博物館・島の館

図 3.　カラヴァッジョ《Ecce Homo》1606 年、油彩画、Galleria di Palazzo Bianco、ジェノア（イタリア）

図 4.　ディルク・バウツ《悲しみの人としてのキリスト（Man of Sorrows）》1470 年頃、ナショナル・ギャラリー、ロンドン

図 5.　ディルク・バウツ《荊冠のキリスト（Christ crowned with thorns）》1470-1475 年頃、ナショナル・ギャラリー、ロンドン

図 6.　ヒエロニムス・ボス《Christ Mocked (Crowning with Thorns)》1495-1500 年頃、油彩画、ナショナル・ギャラリー、ロンドン

図 7.　大型メダイ「Ecce Homo」（館浦地区 I 家御前様）、銅鋳、平戸市生月町博物館・島の館

図 8.　大型メダイ「Ecce Homo」（山田地区正和 3 垣内御神体）、銅鋳、平戸市生月町博物館・島の館

図 9.　《Ecce Homo》「デウスの十戒」部分、銅版画、徳川ミュージアム、水戸

図 10.「XXV（Ecce Homo）」『西洋銅版画帖』、銅版画、徳川ミュージアム、水戸

図 11.　板踏絵「Ecce Homo」、木枠内銅鋳長方型浮彫、東京国立博物館

図 12.　板踏絵「Ecce Homo」、木枠内銅鋳長方型浮彫、東京国立博物館

図 13.　板踏絵「Ecce Homo」、木枠内銅鋳長方型浮彫、東京国立博物館

図 14.　板踏絵「Ecce Homo」、木枠内銅鋳長方型浮彫、東京国立博物館

図 15.　萩原祐佐に帰属、真鍮踏絵「Ecce Homo」、真鍮製、東京国立博物館

図 16.　萩原祐佐に帰属、真鍮踏絵「Ecce Homo」、真鍮製、東京国立博物館

図 17.　萩原祐佐に帰属、真鍮踏絵「Ecce Homo」、真鍮製、東京国立博物館

図 18. 萩原祐佐に帰属、真鍮踏絵「Ecce Homo」、真鍮製、東京国立博物館
図 19. 萩原祐佐に帰属、真鍮踏絵「Ecce Homo」、真鍮製、東京国立博物館
図 20. 銅鋳「Ecce Homo」、東京国立博物館
図 21. 銅鋳「Ecce Homo」、東京国立博物館
図 22.《Ecce Homo!》石板画彩色、東京国立博物館
図 23.《Ecce Homo》浮彫、鮑貝製、東京国立博物館
図 24.「荊冠のキリスト」花鳥蒔絵螺鈿聖龕（部分）、油彩画、岐阜市歴史博物館
図 25.「XXIIII（キリストへの荊冠）」『西洋銅版画帖』、銅版画、徳川ミュージアム、水戸
図 26.「キリストへの荊冠」《聖母十五玄義図》〈原田本〉部分、紙本著色、京都大学総合図書館
図 27.「キリストへの荊冠」《聖母十五玄義図》〈東本〉部分、紙本著色、茨木市立キリシタン遺物資料館
図 28.「キリストへの荊冠」《ロザリオ図絵》部分、和紙泥絵、浦上天主堂旧蔵、長崎、1945 年消失
図 29. ヒエロニムス・ボス《Ecce Homo》1475-1480 年頃、油彩画、Städelsches Kunstinstitut、フランクフルト